HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	歌人・逗子八郎研究 ： 文芸エリート及び厚生運動の視点から(二)
著者	田中，綾
引用	北海学園大学人文論集，43：130-114
発行日	2009-07-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

歌人・逗子八郎研究
――文芸エリート及び厚生運動の視点から――（二）

田中　綾

一　旧制第一高等学校文藝部『校友會雑誌』

逗子八郎／井上司朗が短歌創作に手を染めたのは、大正八（一九一九）年、一六歳の夏休みであった。宿題として課せられた短歌を母親に指導してもらったことがきっかけであるが、母・志げ子（文久三・一八六三～昭和一三・一九三八）は美濃大垣藩で祐筆をつとめた杉山家の長女に生まれ、十代には八代集に親しみ、上田秋成や曲亭馬琴などの熱心な読者でもあった。逗子／井上は高等学校一年の夏、母親のすすめで近江伊吹山麓の伯父の家を訪れた折、歌ごころが「初めて湧然と揺り動かされ」[1]、作歌にうちこむようになったという。したがって、本格的な作歌は高等学校入学以降のこととなる。自筆略歴にも、「大正八年より作歌、大正十年、一高短歌會幹事となる」[2]とあり、旧制第一高等学校では短歌会の「幹事」として活動していたことがわかる。

旧制第一高等学校（以下、「一高」の略称を使用）は、明治八（一八七五）年に東京英語学校として創設され、東京大学予備門、第一高等中学校を経て、明治二七（一八九四）年の高等学校令公布により「第一高等学校」と改称された。明治二三（一八九〇）年に自治制が許され、皆寄宿の自治寮制度を特色とし、シンボルは「護國旗」であった。その図柄は、真紅の絹地に二条の白線を引き、中央の「國」の字を抱く柏葉と橡欖を金糸で縫いとったものである。一高は、「護國旗の精神を以て本校教育の精神とし單に人間完成を目的とするのでなく『國士』の養成を以て目的とし」[3]た国士教育の場でもあった。他のナンバースクールよりも多くの志望者があった一高は、明治三四年には入試倍

（一）

率が四・四倍、そして大正四年には七倍にも上っていた。[4]

東京市出身の井上（一高時代は本名「井上司朗」で創作活動を行っているため、以下「井上」の名で記す）は六人きょうだいの末男児であり、次兄は横浜高商教授・生糸経済研究所長の井上鎧三（明治三三・一九〇〇～昭和一四・一九三九）である。胸を病んだ父親よりも「厳格なスパルタ式の教育方針」[5]で接した母・志げ子は、井上鎧三と司朗の教育には特別に熱を入れ、その環境下で、井上も受験勉強に勤しんだ。当時築地にあった立教中学校では剣道部に所属していたが、受験期には一高受験に備えて道場通いは休みがちになり、毎週火・木曜は神田の講習会に通うようになったという。[6]

その頃、父親の療養もあり、井上家はかねてから避暑に利用していた保養地に別荘を建築した。鎌倉町滑川海岸橋下流左岸の下河原に建てたその別荘で、井上司朗は引き続き一高受験に備えていた。[7]当時の鎌倉は政・財・官・学界のエリート層の別荘地であり、井上家の別荘から五、六分の距離に、一高の名物教授・菅虎雄の家があった。夏目漱石の旧友であり、書道の大家でもあった管虎雄のもとを、のちに井上司朗はたびたび訪れることとなる。さらにその近くには、菅虎雄が借家を世話した大佛次郎が住んでいた。

（二）

作家・大佛次郎は、一高二年在学時に、寮生活を描いた中学生向けの読み物『一高ロマンス』（大正六年）を「野尻草雄」の筆名で上梓しており、翌年五月には四版となるほど受験生に読まれていた。井上司朗は一高入学後の大正一〇（一九二一）年頃、先輩に紹介され、[8]大佛次郎の知遇を得た。以降の交流は前出の井上司朗『証言・戦時文壇史』に詳述されている。

井上司朗が一高に入学した年は、「同期で親しかった堀辰雄君と神西清君」[9]という記述にしたがえば、大正一〇年、一八歳のこととなる。[10]大正一〇年の一高入学者には、堀辰雄（理乙）、神西清（理乙）、小林秀雄（文丙）、深田久彌（文乙）らがいた。井上司朗は深田久彌と同じく「文乙」＝文科でドイツ語を専攻する乙類に入学し、前述の菅虎雄にドイツ語を学んだ。

約三〇〇人の新入生とともに、井上司朗は三年間の寮生活を送り、撃剣部（剣道部）と文藝部で活動した。「堀、神西と私とは、特に堀とは、一高時代、最初ははげしいライバル同士であり、後に親友となった。（略）私が役人となってからも、私の身の上について一番親身になって心配してくれたのは、この二人と、外に小林秀雄がいた」[11]等、井上は著書で一高での交友関係についてしばしば触れているが、井上司朗と堀辰雄、神西清、深田久彌らとの接点は、一高文藝部の『校友會雑誌』である。

『校友會雑誌』は、明治二三（一八九〇）年一月一二日に内務省認可をうけ、同年一一月に創刊された。発行所は「第一高等学校校友會」と記され、奥付には「非賣品」と書かれている。昭和一六（一九四一）年、「護國會雑誌」に改題し、昭和一九（一九四四）年六月に廃刊となるまで、三八二冊が発行された。二〇〇六年になって日本近代文学館編『校友会雑誌』[12]で閲覧可能となったが、全三八二冊のうち、関東大震災をはさむ大正一二年の二冊（二九三号、二九五号）は未発見のため閲覧不可能となっている。[13]上田敏、谷崎潤一郎、川端康成、高見順、中島敦、立原道造らを輩出したこの文芸誌の概観は、稲垣眞美氏『旧制一高の文学』に詳述されているが、一高文藝部は、入部希望者はだれでも自由に入部できて活動するという通常の部とは性格が異なっていた。「先任の委員が後継にふさわしいとして選んだ人々がバトンタッチされて、代々の文芸部委員をつとめ」[14]、年ごとに、生徒間で自主的に選ばれた四、五人の委員が運営していくという、いわば文芸エリートの組織でもあった。

稲垣氏の通史的研究は稀少な先行研究であり、その芳著に多く拠りながら、本稿では、閲覧しうる一次資料を適宜引用しつつ、これまで言及されてこなかった一高時代の井上司朗の創作活動と交友関係とを明らかにしていきたい。

二　「一高短歌會」

『校友會雑誌』に井上司朗が発表した作品は、小説一編と、多数の短歌である。

短歌創作は、一高生の創作活動でも一つの大きな流れをなしていた。端緒は第一高等中学校時代、落合直文が国文学科の教授をつとめたことである。[15]東京帝大古典講習科を卒業した落合直文は、明治二二（一八八九）年創立の国語伝習所主任講師となり、歌を講じながら、和歌改良を実作・論ともに進める「あさ香社」を明治二六（一八九三）年に創立した。あさ香社に集った若きらの顔ぶれに一高出身の東大学生が多いことは、新間進一「落合直文とあさ香社」[16]に述べられており、たとえば塩田雨江、武島羽衣、大町桂月、内海月杖らが名を連ねていた。その落合直文が選者となり、同年秋、一高に「歌學會」が誕生した。

落合直文は、教授の立場で『校友會雑誌』に作品も寄稿していた。三首を引用しておく。

櫻

緋威の鎧をつけて太刀はきて見ばやとぞおもふ山さくら花

（三）

上野山に花見にものして

武士のかばねさらしゝところとも志らでや人の花を見るらむ

太刀を拭ひける日

身につけしその世こひしくおもふかな太刀見るたびに太刀とるごとに

以上三首、落合直文

『校友會雜誌』一七号（明治二五・五・二七）

一首目、武士の晴れ姿である「緋威（ひおどし）の鎧」をつけて桜を愛でたい、と歌う国士ふうの一首は、生徒・学生たちに愛唱され、「緋威の直文」とも呼ばれるようになった。病没後に刊行された『萩之家歌集』（明治三九年）の代表歌でもある。

前出『旧制一高の文学』によると、落合直文を慕って、歌学会には一時は寮生が八〇人あまりも参加し、その中に、沼波瓊音（ぬなみけいおん）（本名・武夫　明治三一年文科卒　のち、一高教授）、尾上柴舟（本名・八郎　同年文科卒）らがいた。『校友會雜誌』にはそれぞれ本名で詠草が発表されている。

（四）

月のうたの中に

わがおもふ方はいづこぞはてもなき大海原に月てりわたる

尾上八郎

歸省のみちにて

おのつからほゝゑまれけり今宵しもわか故里にいぬるとおもへは

沼波武夫

同右　五一号（明治二八・一一・三〇）

落合直文は、糖尿病を患うなど健康を害したために一高を辞し、それにともなって歌学会の名は消滅した。しかしその後、歌学会の流れをくむ「一高短歌會」が、明治三九（一九〇六）年に発足した。

一高短歌会発足のあいさつ「一高短歌會に就て」は、「白梅の一枝まづ蕾を破りて向陵の春を告ぐ、茲に吾人同趣味の者相會して一高短歌會成る」と、同年二月の『校友會雜誌』一五四号に「陽炎生」の名で書かれている。筆者は黒田陽炎（本名・朋信　明治四〇年文科卒）であり、当時、佐瀬蘭舟（本名・武雄、明治三六年英法入学、のち中退）らとともに幹事をつとめていた。

明治三〇年代は、新しく興った俳句会の勢いもあり、歌学会

以来の作歌活動は若干滞っていた。前述の「一高短歌會に就て」にも「短歌又は美文等に親むを以て向陵の健兒が健全なる態度にあらずと罵るもの」がいることを明かし、その罵りに対して、作歌は「一つの趣味」ではあるが、「發して三十一字を成す時、其處に云ふべからざる感在り」という魅力を主張している。

一高短歌会では、歌会の詠草は選抜して誌面に掲載するという方針がとられ、同号から「一高短歌會詠草」が掲載されるようになった。以降明治末期は『校友會雑誌』のほぼ毎号に「短歌會詠草」が掲載され、大正期には、短歌会の勢いは文芸部内部でも強くなっていた。以下は大正三、四年頃の回顧談であるが、「私が一高にゐたときは、文藝部は（略）『短歌會』内閣であつた」[17]という一文が見られることも、「一高短歌會」の存在感を語っていよう。また、生徒の側でも短歌を愛好する層が厚く、前述の大佛次郎（野尻草雄）の『一高ロマンス』には、「早中（そうちゅう）」出身の体格の良い新入生の荷物に、與謝野晶子の『春泥集』はじめ多くの歌集があることを語り手の「僕」が発見する場面がある。「僕」がその新入生に「和歌をおやりですか」と聞くと、かれは、「顔を心持赤くして五分刈り頭をがりがり掻きながら『いや、なあに、ほんの好きだと云ふだけです。下手の横好きとでも云ふんでせう』」と応えた。この部分は大正六年の書き下ろし部分（「入寮記」）であり、当時の一高生の短歌浸透度の証言ともいえるだろうか。

そのような短歌愛好者に実作を強く勧めていったのは、吉植庄亮（明治四三年英法卒）であった。のちに印旛沼の開墾事業を完成させ、衆議院議員をつとめた吉植であるが、一七歳から作歌をはじめ、尾上柴舟らの『新聲』にも投稿していた。吉植庄亮は『校友會雑誌』に歌評と作品を多数寄せるとともに、会の発展に力を尽くした。その尽力ぶりは、新入生をさまざまな部が勧誘してまわる時期、吉植も短歌会の幹事として、夜、提灯をもって寮の一年生を「物色して歌の作れさうな奴と見て入會をすゝめにあるいた」[18]という回顧談が物語っている。

『校友會雑誌』は吉植庄亮の卒業近くに二百号を迎えた。その二百号紀念号（明四三・一二・六）に、卒業生らが短歌を寄せているので引用しておきたい。

明らけき心のくまに一點のかなしき濁りしみて煙れり　吉植庄亮

入つ日のあかき光のみなぎらふ花野はとほくほけ溶くるなり　齋藤茂吉

ひたふるに心すさみてみ佛の手のくみやうもなかつかしき

（五）

ころ　　半田良平

同右　二百号紀念号（明四三・一二・六）

二首目の斎藤茂吉は一高三年時に正岡子規の遺歌集『竹の里歌』に邂逅し、卒業後の明治三九（一九〇六）年、伊藤左千夫に入門してから本格的に作歌を開始した。そのため、一高在学中は『校友會雑誌』とは縁がなく、右記の二百号から時折寄稿をしている。三首目の半田良平は、仙台の二高から東京帝大に進学し、当時は窪田空穂を中心とした十月会に参加する新進歌人であった。

このような豊かな人脈から講師を迎え、一高短歌会は、校舎前のミルクホールなどで歌会を重ねた。招かれた講師の顔ぶれは、新詩社『明星』の與謝野寛、與謝野晶子ら、『アララギ』の斎藤茂吉、藤澤古實ら、『アララギ』から離れ『日光』に拠った古泉千樫、『生活と芸術』から『日光』創刊に参画した土岐哀果（善麿）、竹柏会『心の花』の佐佐木信綱、『潮音』の太田水穂、『國民文学』の半田良平、そして『勁草』の宇都野研ら、明治末から大正期の歌壇の縮図ともいえる多彩な顔ぶれであった。

大正一〇（一九二一）年から一高短歌会幹事をつとめた井上司朗の作品は、翌年二月刊行の『校友會雑誌』二八七号に初めて掲載された。「短歌會十一月例會詠草」として一三人の作品が掲載されているが、この例会の講師は『潮音』の太田水穂であった。

（六）

短歌會十一月例會詠草

君が家の月夜の庭に鳴いてゐる一つの蟲に心ひかるる　　太田水穂

うらうらと澄める秋日よ蘆の湖四里帆をあげて我が渡り來し

此の夜鐵路に臥して伊豆の海のあはきを見つゝ銃かきいだく　　（行軍にて）

防禦戦布くとて今し曉の鐵路の草に銃劔の光る　　（同上）

以上三首、井上司朗

同右　二八七号（大正一一・二・一八）

引用のとおり、のちに逗子八郎名で新短歌運動に投ずる以前の井上司朗は、定型を遵守した歌づくりを続けていた。

後に井上司朗は、「私達は大正十二年、伝統ある一高短歌会にしばしばお招きした太田水穂氏によって、芭蕉への開眼をつよくすすめられた[19]」と記しているが、以上の詠草から、歌会で初

めて太田水穂と同席したのは大正一〇年一一月の例会であったことがうかがえる。[20]

昭和四（一九二九）年に『勁草』を創刊し、逗子八郎／井上司朗を客員に迎えた宇都野研も一高出身である。明治三六年の卒業であり、同期には夏目漱石門下の森田草平、また宇都野の寮の同室には評論・翻訳で活躍した生田長江がいた。宇都野研は小児科医開業後の四〇歳から作歌を始めたため、在学中の作品は『校友會雑誌』にはなく、短歌会の講師として大正一一、一五～昭和六年に名が記されている。

大正十一年五月例會　五月十二日　於パラダイス

寝むと思ふ室の眞闇を飛べる蠅物にぶつかり立つる音すも　宇都野研

籠り居の雨音さびし我がこゝろむなしきごとく壁を見つめぬ

寄りそへど心はむなし汝が性にしたしみがたく一日歩けり

峡間路はひるも小暗く時雨せりぬれし草鞋はかそけき音たつ

以上三首、井上司朗

同右　二八九号（大正一一・七・一）

左から四人目（横顔）が逗子八郎／井上司朗
中央の眼鏡の男性が宇都野研
（『勁草』第一巻第五号　昭和四年六月）

（七）

宇都野研と二六歳離れた井上司朗との出会いは、この歌会が一つの縁であったと思われる。

同年九月の例会には、新詩社の與謝野晶子、與謝野寛夫妻と、一高出身の平野萬里が講師に招かれている。平野萬里は明治三五年に工科に入学、在学中からすでに新詩社に加入して出詠しており、『校友會雑誌』にはかかわっていなかった。ゆえに、『校友會雑誌』に歌が見られるのはこの例会での一首のみである。

九月例會　九月二十二日　於鉢の木

吾指とダリヤの影と寢てありぬいみじく白き秋の夜の草　與謝野晶子

快く海よりきたる風ありて詩人の髪のうちなびく時　與謝野寛

深川の空の虚(うつろ)に立ちぼる煙(ママ)の林都會は死なず　平野萬里

思はじと思へど思ふ磯づたひ事々すぎし潮騒の音

水にうつる月たまゆらに亂れつゝ水面をはしる水蟲のかげ

以上二首、井上　司朗

同右　二九一号（大正一一・一二・二〇）

（八）

これらの例会で、井上司朗はどの講師から最も影響を受けたのか。『アララギ』伊藤左千夫門下の古泉千樫（明治一九・一八八六～昭和二・一九二七）である。のちに書かれた逗子／井上の作家経歴に「大正九年古泉千樫の門に入る」[21]とあり、また、「私と竹内敏雄君とは、大正十一年から古泉千樫の愛弟子だが」[22]とも書かれているように、四一歳の若さで没した古泉千樫の、ほぼ晩年の謦咳にふれていたことになる。

一時は『アララギ』編集発行もまかされた古泉千樫は、編集上のことから斎藤茂吉と離反し、この頃は『アララギ』とは疎遠になっていた。大正一三年創刊の『日光』に加わる直前の時期でもあったが、井上の言によれば、その古泉の「愛弟子」が、井上司朗と、一年後輩の竹内敏雄（大正一四年卒、文甲　のち東大名誉教授・美学者）であった。

大正一二年の二九四号には、古泉千樫・井上司朗・竹内敏雄の三人の作品が掲載されている。

一高短歌會詠草　五月例會　於ラバダイス(ママ)

まひる野の青草がなかにありしかば心あやしく妹(いも)し戀ほしも　古泉千樫

天つ日のひかりあまねき畫磯に櫻貝採るとあそぶ少女ら　井上司朗

おのづから寄せびく波の音たえて春のなはぎさ潮干けらしも　竹内敏雄

同右　二九四号（大正一二・七・七）

竹内敏雄は翌一三年度、堀辰雄、神西清らと文藝部委員をつとめることになるが、『校友會雑誌』への出詠は、短歌連作のほか長歌もあり、それら一高時代の短歌は、東京帝大進学後に歌集『冬空』（大正一四年）にまとめられている（未見）。

紀行『日本百名山』（昭和三九年）で知られる深田久彌（大正一五年卒　文乙）も、この歌会同席の一四人のうちの一人であった。

一高短歌會詠草　五月例會　於ラパダイス

まど越しにふるとも見える雨ながら枇杷の葉末ゆおつるあまだれ　深田久彌

同右　二九四号（大正一二・七・七）

深田久彌は『校友會雑誌』に小説も寄せているが、掲載された「短歌會例會」には四回参加しており、四回とも井上司朗と同席している。一高では山岳部にも属していた深田久彌と、就職先の安田銀行山岳会で登山を趣味とした井上司朗は、当時から登山も同行していたのかもしれない。それを裏付ける資料は未見であるが、井上の逗子八郎名での山岳紀行集『山征かば』には、当時、短歌会の人々と「幾首かの心ゆく歌をつくる爲」[23]に武州御嶽山に登ったことが回想されている。同行した「僕の痩せた同級生」の横川久太郎は「多分太田水穂さんに師事してゐたろう」、また、「背の高い優しい先輩」であり「その時大學の工科二年に進んでゐた小原節三氏」は、「もうその頃立派なアララギ同人になつてゐた」とある。大正一二年、井上、横川、小原の三人と深田久彌は、古泉千樫を講師に招いた歌会でも一堂に会していた。ここに引用しておきたい。

短歌會詠草（十一月三十日、於パラダイス）

紅葉みて今日は遊びつ歸り行かば焼けし都に忙しき吾を　古泉千樫

白菊をいけたるかめよ宵ごとに枕べにしてわがねむりけり　小原節三

すがれたる唐黍畑に風出でて葉ずれのさやぎひびく夕空

（九）

横川久太郎

千萬(ちよろづ)の人死なしむる大地震の揺るべき年に得たる君かも

（逝きし子へ）井上司朗

夕やけし濱のなぞへの五葉松の幹にまばらなその枝のかげ

深田久彌

同右　二九七号（大正一三・五・二〇）

歌会の日付から関東大震災後に開かれたものであることがわかり、古泉千樫と井上司朗の作品は、帝都・東京の震災後の風景の証言にもなっている。

三　井上司朗の定型短歌

短歌会での詠草のほか、井上司朗は在学中、短歌連作を二八九号、二九〇号、二九四号の三号にわたって発表しており、二九六号には小説も一編発表している。

二九〇号掲載の「由比ケ濱」二一首は、「秋づく濱邊」一一首と「斷章」一〇首からなる定型短歌である。

由比ケ濱　　井上司朗

（一〇）

秋づく濱邊

くだけ散る波より生(あ)れて入つ日のあかきに映ゆる泡沫(うたかた)のいろ

日は落ちてくらみましゆくなぎさべにくずるゝ波のたゞしろく見ゆ

岩と岩のはざまのぬくき潮たまり雲かげうつるひるのしづけさ

斷　章

かけ追ひて幾夜さびしくあゆみけむ由比ケ濱べも秋づきにけり

忘れ得ぬ聲きくにさへなげかれつはかなき俤(かげ)はひとり思はむ

夢に入ればこゝろさへいまはたのまれず思ひ告げ得む人ならなくに

同右　二九〇号（大正一一・一〇・三〇）

端整な定型短歌であり、浜辺に日が没するまでの波の色と陰翳の変化、また、季節の推移が丁寧にスケッチされている。「由比ケ濱」は井上家の別荘から徒歩圏にある親しい浜であり、また、大佛次郎夫妻らも海水浴を楽しんだ場所であった。後半の

「断章」の歌には茫洋とした人事詠も登場しているが、のちに書かれた小説の題材とも重なるところがある。

翌年の二九四号には「哀歡の樹蔭」の題で、小題「秋」四首、「春」二六首、「そのかみの歌」三七首の計六七首が六頁にわたって掲載されている。末尾に「一九二三、五、改作」と付されており、過去の作品を改め、まとめて掲載したとも考えられる。数首ずつ引いてみたい。

哀歡の樹蔭　　井上司朗

秋

昨秋朝比奈峠を越えて武蔵金澤に赴けり

おのづから日昃（かげり）ははやき山峽（やまがひ）をかくゆき久しおのが靴音

春

日にけに山の若葉はふかし、友を御堂ケ谷に訪ふ

段かづら葉ざくら道となりにけりセルつけし少女（こ）のほゝのあかるさ

目見（まみ）あげてふかき若葉に息づけりわれに傾く楢山の樹々

そのかみの歌

歸省

襖あけて出て來し人におどろけりすこやかにして妹はありにし

歸京の前夜

妹寝ねてこの家ぬちの夜はふかし雨戸に觸（ふ）るる庭の竹の葉

夜をふかみ燈（ともし）のもとにながの母と語る思のつきざりしかも

同右　二九四号（大正一二・七・七）

いずれも旅先、または帰省した実家が歌材となっており、寮での日常に即した生活詠ではない。「けり」の多用が一連を単調にしている感もあるが、破綻のない歌いぶりである。妹が病みがちであることも歌われているが、久かたぶりの家族との団らんは、素直な感情としてあらわされている。

年次は前後するが、二八九号（大正一一年）に発表した二二首の「旅のうた」も全編旅先での作品であり、かつその「旅」の詳細も伝えられている。

「旅のうた」前半の一六首には「彌生旅行の途上」と後注があるが、「彌生旅行」は三月の旅行という意味ではなく、一高と学習院、東京帝大の撃剣部の有志が集った「彌生會」での旅をさ

（一一）

す。「彌生會」は、大正一一（一九二二）年四月六日から一六日まで北陸遠征をした。その行程は『校友會雑誌』同号に「撃劍部報　彌生會北陸遠征之記」として掲載されており、執筆者の記載はないが、参加者二九人の中に「井上司朗」の名前がある。井上司朗は中学生の頃、金沢藩直心影流の木村敷秀（のぶひで）師範に入門、一高でも文藝部とともに撃劍部に所属していた。同じ木村門の剣友・市川清敏（ソニー創業者の一人・井深大の義弟）[24]もこの北陸遠征に参加しており、井上司朗と同じ旅程にあった。以下、短歌作品の前に、詞書きふうに「撃劍部報　彌生會遠征之記」を併記し、歌の背景を補足していきたい。

旅のうた　　井上司朗

四月六日　午後八時四十五分東京驛を發してより（略）一氣にして西下長濱をつく。

北國小景

夜くだちに山ふかく汽車の入りにけり谷にこもりてさやけき瀬の音　（車窓四首）

（一二）

四月八日　一同五時半起床、港は大船小船でうづめられ、海彼渺々として勝景實にいはん方なし。金ヶ崎城趾の山腹を縫ふ櫻花爛熳として雲か花かと疑はるゝ計りなり。

十時より警察署にて稽古す。（略）相手は皆警察署員及び憲兵なり。二時間にして終へ、署員の案内にて金ヶ崎城趾に至り、（略）獣疫研究所を見、松原公園を經て午後四時三十六分多數の見送りを受け敦賀を辭す。

櫻いま眞白なりけり潮（うしほ）の香かすかににほふ石階（きざはし）の上に　（金ヶ崎二首）

はるはると都をさかりつるがなる松原にまひる海鳴をきく　（松原公園三首）

語るすべなき一時をなれや忘るともその松原はながく忘れじ

四月十一日　午後二時より四高道場無聲堂にて稽古を開始す。始め中等學校と對す。（略）約五十分にして四高及び醫專と代る。（略）彼は北國に技を練る四高健兒我は東都に氣を練る向陵男子、一騎當千の若武者共、茲を先途と戰ふ。

四月十二日　十時四十分金澤を立つて七尾に向ふ。（略）七尾港より汽船

にて海路勝景を送れば和倉温泉に至る。遙か後に望むは白雪皚々たる白馬、立山連峰なり。

菜畠の傾斜（なだれ）きはまりし松山の木の間を透（す）きてあほき海見ゆ　（七尾灣五首）

島かげに落ちてゆく海の夕陽（ひ）のはやき舳先（へさき）にあかき友の顔ならぶ

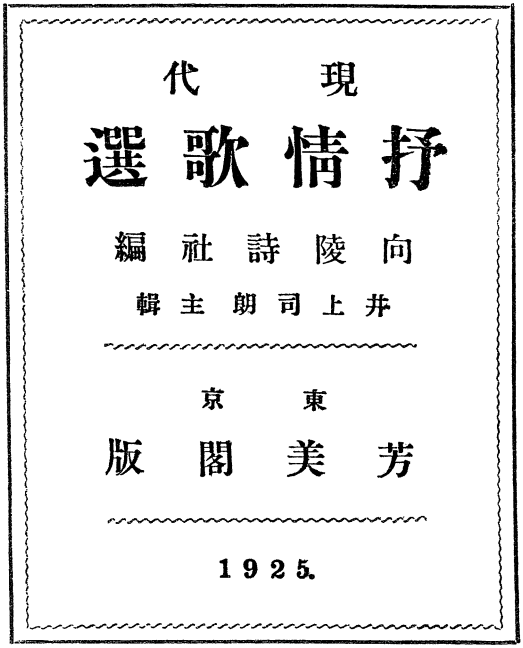
この宿の床下（ゆか）ちかく海はたゆたへり岩藻をくゞりしはしる魚見ゆ　（和倉温泉）

同右　二八九号（大正一一・七・一）

一高、東京帝大というエリートたちの撃剣部の動向がつぶさに書かれているが、その「撃劍部報　彌生會北陸遠征之記」と比するに、短歌作品では抒情質が際立っている。五感を通した描写は技術的にも練られており、対象に肉迫しながらも過剰な詠嘆を避けているところに力量を感じさせる。

これら井上司朗の定型短歌に対する同時代評はあまり見出せないが、前出の『校友會雜誌第三百号紀念　橄欖樹』の「文藝部略史」には、大正一一年度について「短歌は再び興らんとし井上司朗、横川久太郎、原重一等堅實な歌風を見せてゐる」と、「堅実な歌風」という評言が見られる。また、続く大正一二年度についても、「短歌は竹内敏雄、井上司朗の両氏最も優れ、他に原重一、大村芳彦氏等がある」と書かれており、竹内敏雄らと並んで「優れ」た短歌作者として井上司朗の名が記されている。

同じ二八九号に掲載された井上司朗の小説と、大正一二年度文藝部委員については、次回に記したい。



（一三）

現代抒情歌選　【定價金貳圓六拾錢】

大正十三年二月廿五日印刷
大正十四年一月一日發行

不許複製

編輯者　向陵詩社
代表者　井上司朗
發行者　山添榮一　東京市本郷區四丁目四番地
印刷所　杉本印刷所　東京市麹町區飯田町六丁目一番地
發行所　東京市本郷區四丁目四番地　芳美閣

發賣元　東京市本郷區四丁目四番地　振替東京九五二七　文武堂

四　向陵詩社編『現代抒情歌選』

一高短歌会幹事として井上司朗が為した大きな仕事は、二年をかけて編集した『現代抒情歌選』の刊行である。近代短歌約六千首を、「相聞篇」「親愛篇」「病痾篇」「挽歌篇」「寂心篇」の五篇に分けて編んだアンソロジーであり、向陵詩社編として大正一四（一九二五）年一月、芳美閣から刊行された。

（一四）

主輯代表者・井上司朗の名で、巻末にはこう記されている。

此の貧しき書も時間に乏しい我等にとつて過去二ケ年の苦しい努力の結晶であつた。

憂鬱な高等學校生活を送つてゐた當時、自分の心は歌に依つて僅に息づいてゐた。歌はいつのまにか自分の生活と離れることのできぬものとなつてゐた。かくて平生散見する短歌の同人雑誌等より特に人事的方面を主材とした歌を抜き出して一冊のノートに記入することが久しくつづけられてた。[ママ]

或る冬の夜、一時足遠になつてゐた一高短歌會に偶々出席してこのノートを示し（略）このノートを基礎として（略）我等の所謂抒情歌の選集の編纂を期したのである。

巻末記『現代抒情歌選』

その編纂作業は、大正一二年の関東大震災で「一時全く頓挫を來して仕舞つた」が、「向陵詩社（第二次）[25]の事業とし」て続行、竹内敏雄ら後輩たちと協力して、若山牧水、尾山篤二郎らから雑誌や歌集を拝借し、校正を経て、四七〇頁近い一冊の刊行に至った。採録された短歌は、『アララギ』『明星』『國民文学』

『心の花』『詩歌』『潮音』『橄欖』『日光』など、明治、大正期のおもだった歌誌から採られており、当初は二万余首であったが、八千首、そして六千首に絞られていった。

『現代抒情歌選』への同時代評は現時点では見出せていないが、読後の感想文は『勁草』に書かれていた。客員であった逗子八郎／井上司朗が歌会の折にでも貸与したのだろう、勁草横浜支社の大塚政光が、「逗子氏から拝借した『現代抒情歌選』（略）、向陵詩社（代表者井上司朗氏）編輯により大正十四年一月芳美閣より發行されたもの、随つて採録された作品は大正十三年以前の我歌壇の収穫である。（略）可成り性的香氣の高い作品が少なくないのには驚かされたが、これは文壇の自然主義或は寫眞主義風潮から影響されたのではなからうか[26]」と述べ、第一篇相聞歌篇から一三首が引用されている。一部を引いてみる。

かなしもよともに死なめといひて寄る妹にかすかに白粉にほふ　松倉米吉

朝なればさやらさやらに君の帯むすぶひびきの悲しかりけり　古泉千樫

草花のあかきしげみにおさへあへぬくちづけの音のたへがたきかも　北原白秋

ほか、「挽歌篇」では近代短歌の先人である伊藤左千夫や長塚節、石川啄木の死を悼む歌をはじめ、編集のさなかの大正一二年に縊死した有島武郎への挽歌も収めるなど、目配りの良い編集がなされている。

『現代抒情歌選』校正が終了し、一高短歌会の現役幹事らが井上司朗の仮寓を訪れたのは、大正一三（一九二四）年一二月であった。その年の井上は、周囲の反対を押し切って東京帝大文科に進学し、逗子の農家に部屋を借り、逗子開成中学[27]で講師をしながら帝大に通った時期であった。翌年、家庭の事情で法科に転部し、作家になるという夢からは距離をおくこととなる。

のちの筆名「逗子八郎」は、一高短歌会での集大成をなしたその地からとられた名前であった。

（続く）

注

(1) 逗子八郎『八十氏川』第一書房、昭和一九年　三〇五頁

(2) 『新萬葉集』第九巻　改造社、昭和一三年

(3) 第一高等學校長　森巻吉「第一高等學校」『文部時報』第五三七号、昭和一一年一月一日（『旧制高等学校全書』第四巻、一五）

旧制高等学校資料保存会刊行部、一九八一年所収　九五―九六頁

（4）福島行一「解説『一高ロマンス』について」八頁（野尻草雄『一高ロマンス』復刻版　大佛出版、昭和五四年所収）ただし明治四三年には無試験入学の途があり、芥川龍之介、久米正雄らは無試験合格者であった。

（5）前出『八十氏川』三〇五頁

（6）逗子八郎『こゝろの山』昭和一三年、朋文堂　一七〇頁「神田の講習会」は研数学館か正則英語学校と思われる。

（7）井上司朗『証言・戦時文壇史』人間の科学社、一三二～一三三頁

（8）紹介者は、近くに住んでいた田村清三郎（一高文丙、大正八年卒）。前出『証言・戦時文壇史』一三八頁

（9）前出『証言・戦時文壇史』一五九頁

（10）年齢からは大正九年入学も考えられるが、著書には入学年が明記されていない。

（11）前出『証言・戦時文壇史』六七頁

（12）ｗｅｂ版。製作・発売は八木書店

（13）この未発見の二冊は井上司朗が文藝部委員として任期中のものであった。

（一六）

（14）稲垣眞美『旧制一高の文学』国書刊行会、二〇〇六年　三頁

（15）前出『旧制一高の文学』二六～二九頁

（16）『近代短歌史論』有精堂出版、一九六九年所収

（17）本荘可宗「追憶三つ」校友會雑誌第三百号記念『橄欖樹』大正一〇年　八頁

（18）岡田道一「あの頃」前出第三百号記念『橄欖樹』五五頁

（19）前出『証言・戦時文壇史』九六頁

（20）なお太田水穂の名を『校友會雑誌』で確認できるのは、二七一号（大七・四・二〇＝同年三月八日、根津娯樂園で歌会）、二七九号（大九・四・一五＝前年九月二六日、同園で歌会）と、この二八七号の三冊のみである。

（21）新短歌クラブ編『年刊歌集　一九三七年新短歌』第一書房、昭和一一年　三六二頁（逗子八郎）「大正九年」は「十年」の誤りか。

（22）前出『証言・戦時文壇史』三〇頁

（23）逗子八郎『山征かば』中央公論社、昭和一六年　三一一～三一二頁

（24）前出『証言・戦時文壇史』四四頁

（25）一高生有志による向陵詩社の第一次は大正九～一二年で

あり、酒井眞人編『橄欖の森』は創刊号から三号まで刊行された。三号には堀辰雄の詩「仏蘭西人形」も掲載。

(26) 「濱居閑話」『勁草』第三巻第九号　昭和六年九月

(27) 現在の逗子開成中学校・高等学校。同校の校歌は井上司朗が大正一四年に作詞をした。

（一七）